

薬師寺東僧房発掘調査現地説明会資料

薬 師 寺
奈良国立文化財研究所
1979年9月19・20日

発掘調査は東僧房の再建工事に先立ち、その資料をえることを目的として、薬師寺の依頼により奈良国立文化財研究所が行なった。8月6日に調査を開始し、約900㎡の発掘調査したので、ここに中間報告を行う。

薬師寺東僧房については、昭和45年に薬師寺発掘調査団（団長杉山信三博士）が基壇南縁の全長約55mと、第1房を明らかにし、東僧房の位置、規模および坊の間取りがほぼ確定している。今回はこの既発掘区を含めて大房第1房から第9房まで全面の発掘調査を行なった。遺構の保存状況は第1房と第2房は良好であったが、第3房以東はきわめて悪く、中世に大きな土塚がいくつも掘られ、その上さらに遺構面が削平されている。礎石はすべて抜き取られていたが、礎石据付掘形および地覆石抜き取り痕跡より、大房第1房から第6房まで明らかにすることができた。

東僧房の基壇は40cmほどの掘込み地業を行なっている。基壇南面には玉石を抜いた痕跡が残され、土間の高さから考えると、玉石数個を積上げた玉石積基壇となろう。大房（第1～第9房）は東西に長い建物で、食堂と棟心をそろえ、西僧房と対称の位置に配置される。大房一房分の規模は梁行4間11.4m（9尺+10尺+10尺+9尺）、桁行2間6m（10尺+10尺）であり隣の房とは壁で間仕切られている。各房は梁行20尺の身舎と前後各9尺の廂部分からなり、大きく前・中・後の3室に分けられる。内部は土間床である。第1・2房の南側面には凝灰岩の地覆石が6mの間口を引通しており、中間に礎石は存在しない。この地覆石の内側に接して中央部分2.1mにわたって凝灰岩を並べており、両側に袖壁を設け、中央を開口部としていたらしい。中室の正面は3間にわりつけ、中央間を扉口とする。背面は中央に柱を立て、西の間は壁、東の間は後室への扉口である。第1房の中室には西に寄せて床を張った東石の抜きとり痕跡があるが、3房以東は土間が削平されており東石の配置は不明である。後室は東西2室に区分される。東側は背面に扉口や壁の痕跡はなく、開放となっていたようである。この大房の北側2.4m（8尺）で付属室の礎石据付掘形、梁行2.4m（8尺）を検出した。以上の結果、東僧房は西僧房と全く同じ平面形式であることを確認した。

第1・2房の土間は赤く焼けており、木炭が散乱していることにより、東僧房は焼失したものと考えられた。昭和45年の調査において土師器・黒色土器などが重なって焼落ちた状態で出土したと報告されている。これらの土器の年代は10世紀後半

頃と考えられるので、東僧房の焼失は平安時代の『薬師寺縁起』に記載されている天禄4年（⁹²³）の食堂童子宿所からの出火による僧房焼失の記載とも矛盾せず、今回の調査地区において、僧房は焼失後再建されていない。

出土遺物は大部分が瓦で、大土塚および雨落溝から出土した。これらの瓦には奈良時代から室町時代頃までのものを含む。土器の出土量は少ないが、第4房の土塚から12世紀頃の土師器、瓦器がまとまって出土した。



